

訓練されたる人情

一

玉千代がこの土地に出るようになったのは、彼女が十八で法界屋^{ほうかいや}にまじってこの近辺に流して来たのを、鈴源の女将が目につけたのに始まると云われていた。

「まあ御覧よ。あの手振りの軽いことを。あれは仕込んだら、お前、物になるよ。」

鈴源の女将は、この場末の町にその頃出来た一品洋食屋の店先で、彼女が活惚^{かつぼれ}を踊っていたのを通りがかりに見て、妹の三升家の玉吉にそう囁いたのだそうです。

それから間もなく三升家のお抱えになり、法界屋時分に呼ばれていたおゆきは改めて玉千代と呼ばれる事になった。

そこは東京の郊外でその近辺に有名な薬師があるので、その薬師を中心にこの二三年前からやっと花柳界が出来かかったが、最初のうちは芸奴^{げいこ}と呼ばれずに師匠と呼ばれていた。そういう名義でなければ警察から許可が下りなかったのである。

省線電車のN駅からその薬師まで行く十町ほどの道のりの間には、畑が見えたり田圃が見えたり、処々にはまだ武蔵野の名残りの雑木林の向こうに三味の音の聞える一郭があるなどとは、一般の人には一寸気がつかない位だった。

もっとも昔から有名な薬師なので、料理屋だけは随分前から四五軒その附近に出来ていた。その中でも鈴源は最も古く土地の草分けと云われていた。

客筋は恵方^{えほう}を気にする東京の株屋町が主だった。薬師に参詣かたがた東京から芸奴をつれてやって来て、帰り道に料理屋で一杯引っかけよう云ったような客は、省線電車がまだN駅まで延びない昔からあった。が、近頃この土臭い田舎に「師匠」が出来たという事になると、それが又好奇心を惹いたものか、若い遊びざかりが東京での飲み足りなさを夜更けてから此処までのして来ると云うような風に次第になって行った。

それから又一廉^{ひとかど}の獵奇家を以て任じながら、ふところの淋しさ市内では思いきり翹^{はね}をのばせない云ったようなサラリーマン達が、いつの間にか此処を嗅ぎつけて、月末になると割カンで一台の自動車に満載されて、一ヶ月のうさをぶっ放しにはるばるやって来るようになって来た。こんな連中は大きな声でデカンショなどを合唱しながら、夜更けまで薬師の森の鼻^{ぶくろ}の目をきよとんと瞠^みはらせていた。

師匠の置屋が三軒に師匠の数が九人。それ等三軒の女主人達は今の意味での師匠の許可のまだ下りなかった時分、時々料亭から迎えが来ると、白髪染^{しら}がぞめで染めた髪を小さな鬘にして頭の天辺^{てっぺん}に載せ、三味線をぶら下げて客席にのこのこ顔を出しに行った婆さん達だった。義太夫^{ぶと}の専門が一人、清元が一人、小唄が一人、そして三升家の玉吉は最後の小唄の師匠で、踊りも相当こなしていた。姉の鈴源の女将と一緒に明治の中期には新橋に出ていたとかで、姉が兜町の好い旦那がついて、その旦那が死んだ

後も鈴源の女将としてこうして片隅ではあるが相当やって行くので、彼女が新派俳優で一時鳴らしたIの妾になり、Iが死んだ後は余り好い事もなく暮らしていたのを、骨肉の愛からこの土地に呼び寄せて、遊びがてらに小唄の師匠をさせたわけだった。

この三人の老師匠達は、所謂新しい意味での師匠の許可地にこの土地がなると、三人相談して置屋になり、若い妓^{おんな}達を抱え、客の所望があれば自分達も相変らず小っぼけな鬻^{まけ}を頭の真ん中に載せて、のこのこと三味線片手に出かけて行くのである。そして総数九人という数の中には、この三人の婆さん達も数えられているわけである。土曜日と日曜日とそれから月末の三四日の外は至って閑散で暢気^{のんき}だった。他の土地のように面倒なつきあいもなければ、無理をして歌舞伎の変わり日毎に見に行かなければならない義理もなかった。回向院^{えこういん}の相撲を見た事がないという若い妓が実際にいる位だった。そんなわけだから、別段他の土地のように衣装^{いしょう}で苦勞しなければならぬこともなかった。実際どんななりで座敷に出ようが、お客もお客で、ひなびた土地にはひなびた師匠が調和がとれているとでも思っているらしく、そんな事は問題にしなかった。

その暢気さが薬になったためか、玉千代は編笠をかぶって三味線を抱えて流していた頃から見ると、見る見る血色が好くなり頬の肉が豊になって行った。おかめ質の顔の女によくあるように、生来肌のキメが細かで色が抜けるように白かった。丸顔の割合に手足が細く長くて、白い指先に桃色をした貝殻のような爪が行儀よくなっていた。男を夢中にさせるような美しさが顔にあるわけではないが、併しほっそりしながら少しも骨ばらず肉附がみっちり豊かで、而もその肢体のなよなよしている柔かさが妙に男の欲情をそそる色っぽさを持っていた。それに気さくで、楽天家で、人見知りをしないう陽気な性質が何処の座敷でも評判がよかった。

物覚えの好い妓で、玉吉姐^{ねえ}さんの小唄を直ぐ器用に真似たし、踊りもどうやらこなして行ったし、活惚^{かつぼれ}をやれと云われれば、それは法界屋時分のお手のもので活潑にやっていたし、時には「雨しよぼ」などという難題を吹っかける客があり、若い妓達が互いに顔を見合わせたりしていると。「よし来た、負けちまえ」などと云って彼女は勇敢に飛び出して行ったりもした。そして踊っている時は彼女の肢体の動きや眼の表情で彼女は相当美人に見えた。

「何しろ素晴らしい曲線だよ。君の踊を見ていると俺は堪られなくなる。」

K工業会社に出ているオーさんが酔った紛れに立上って来て、丁度踊り終った彼女の身体をつかまえて肩を撫でたり腰をさすったりしながら、

「諸君、彼女のこの線を見給え。腰、肩、それからこのほっそりとやんわりした手。――僕は手の綺麗な女を見ると全身の血がむらむらと沸き立つです。」

おどけた調子で云って彼女の手をいきなり大勢の眼の前で接吻した時、彼女は身内が妙にぞくぞくした。それから彼女はこのオーさんが好きになり、朋輩の君香をたのんでN停車場前まで一緒に行って貰い、そこの公衆電話でオーさんの会社に君香の声で電話をかけて貰い、そしてオーさん呼び出して貰った。法界屋をやっている間彼女は電話と

いうものをかけた事がなかった。彼女はこの機械に馴れるまで相当の月日がかかった。何故電話をかけに停車場まで行ったかという、三升家には電話がなかった。土地から掛けるとすると鈴源に行って借りなければならなかった。併し帳場の近くの電話ではオーさんと思切った話をする事が気がひけた。一度鈴源の女中にオーさんと呼び出して貰って掛けた事はあったが、話が済んで勝手口から出て行こうとすると、彼女は女将に呼び止められたのである。

「玉千代さん、お前お客に惚れちゃ駄目だよ」低い声ではあったがそう云った女将の眼附はぎろりとして可より恐かった。それから十町の道を君香を誘って停車場まで一緒に行き貰う事にしたのである。

N停車場に近づいて田圃道から町通になるとつぎに、その頃萩の餅屋が出来た。停車場の向う側は此片側よりも先に開けて相当の町になっていたが、その向う側の町の方からも盛んにそこまで買いに来る程、その萩の餅屋は近辺で評判になっていた。

電話の帰りには玉千代は君香に萩の餅を奢った。

「おのろけ賃よ」あけすけな物の云い方をする玉千代は、一人で胸に畳んでは置けないと云ったように、オーさんとの逢瀬の楽しさをいろいろ細かに君香の前にさらけ出した。

「まあ、この人ったら！」と思わず君香が金切声を揚げて彼女の肩を叩く真似をした程、玉千代はややもすると露骨な事さえ平気でのろけた。

品の良い老婆が二人を見ると洪茶を屹度きつと入れかえて出してくれるその萩の餅屋の片隅に腰をかけて、そんな話をしている事は、玉千代には楽しい事だった。

「あたしも玉千代さんのような気になれたらどんなに好いだらうと思うわ。どうして始終こんなにくよくよしているのでしょうか。損な性分ね。」

同じ年の君香は躁はしゃげない性分で、座敷でも時々陰気に黙りこくっていたりしたが、こんな風に玉千代にしんみりした話を時々持ちかけた。彼女は深川の方に揃って病身の両親が生きていた。その次の妹は十六になるが深川の或工場で女工をしていた。その次は十歳で小学校に通っていたが、その小学校は特殊学校と云われる貧民小学校だった。

「特殊学校なんかに入れて置きたかあないのよ」

そのトクシュガッコウという言葉の意味が最初は玉千代には解らなかったので、相手が生んみりしてそんな話をする時、玉千代はスットンキョウな顔をして、

「トクシュガッコウって何あに？」と突然大きな声で質問を發したりした。玉千代は小学校にも碌すつば通った事はなかった。

「あら、いやだ、この人はそんな大きな声を出して——」萩の餅屋の婆さんの耳に聞えやしなかつたかとはらはらして、君香は小声で玉千代をたしなめながら、特殊学校の意味の説明を細かにしてやった。

「あら、そう、そういう事なの、六カ敷いんで何の事か解らなかつた。」

別段何の感動もしないような顔附でそんな風に受け答えする玉千代が君香には物足りなかつた。けれども性質がまるで違ってどんな話をしてもらへらへらと笑っている玉千代は、

又彼女のむすぼれた心持ちを解かしてくれるのには丁度よくもあった。

「好いわね。あんたと話していると、苦勞っていうものが何処かに飛んでってしまうわ」

「そうよ。苦勞なんかしたってつままないわよ。どうせこの世の事なんて考えて見たって解りやしないのさ。面白おかしく笑って暮らしていりゃそれでいいのさ」

併しそんな風には云うものの、君香のところにその母親が心臓病で青ぶくれになったような身体をよちよち運びながら、手みやげに煎餅などを持って会いに来て、何やらぼそぼそと片隅で話し合い涙ぐみ合ったりしているのを見ると、玉千代も時には自分の身の上を考えて見ずにいられなくなるような事もあった。彼女は野州の烏山で生れたが、彼女の物心地のついた時父はいなかった。そして母は彼女の四つの時死んでいた。それから七つの時から彼女は知らぬ小父さん小母さんの手で諸所方々をつれ廻され、皺唄れ声で流行歌を唄わされたり、赤いメリンスの振袖で田舎田舎の盛り場の軒に立っては活惚を踊らされたりしたのだった。

二

或時、やはり停車場まで電話をかけに行つた帰りに、萩の餅屋の片隅でお茶を飲んでいゝる時、玉千代はふと君香にこう云つた。

「困っちゃつたわ、あたし」

「何が？……」

「あんただから云うけれどね、どうも出来ちゃつたらしいのよ」

「え？」と君香が吃驚ひっくりした眼を瞠みはると、玉千代は眼でにこっと笑いながら自分のお腹を軽くさすって見せた。

「あら、ほんとう？」

「うん」

「まあ、でも、まだどうだか解らないいでしょ」

「それははっきりとは解らないんだけど、でもどうもそうらしいのよ」

玉千代は再び帯の上からお腹をさすって見せた。彼女の経験では、殆ど疑いがなかった。彼女は十六の時に女の子を生んだ。それはやはり旅から旅へと渡つて歩く或浪花節語りとの間に生まれた子供であるが、彼女はそれを烏山で生み落し、直ぐ産婆の手から何処かに遣つてしまつて、それきり二度と子供の顔を見た事がなかった。

「やっぱりオーさんの？」

「ええ、そうよ」

「ふうん……」君香は人事でないという陰気な顔をした。

「やっぱりオーさんの？」というように訊きながらも、玉千代自身にもそれが自分だったとしたら一体誰の子だという見当が直ぐつくだろうか？……まるでそれが自分の事でもあるように、夜毎夜毎に会つては何処かに消えて行つた幾つかの男の顔を彼

女は思い出していた・・・・・・

三四回呼び出しの電話をかけてもオーさんがやって来なかった時、玉千代よりは、君香が焦立ち、玉千代を急せき立てながら二人はN駅から電車に乗って京橋の工業会社に出かけて行った。

オーさんが留守だと云われたので、オーさんと二度ほど一緒に来てその度に君香がお伽とぎに呼ばれた千田さんを君香が呼び出した。三十五六の年の割に頭が禿はげがかかったでっぷりした人物、遊び馴れたツキの好い男だった事を思い出して、君香はこの朋輩の事件に屹度きつととタヨリになってくれる頼もしい人に違いないと玉千代に囁いた。

「のこのこと会社の受附などにやって来られると好い加減面喰めんくらうぜ。」千田さんは紺の背広のでっぷり出た腹の上撫で撫でて来て一寸眉をしかめたが、世間馴れした気サクさで直ぐ笑顔を作り、「どうしたんだい、買物にでも出て来たのかい。・・・・・・そこまで行ってお茶でも飲もう」

二人の先に立って会社の入口を出て行くので、彼女達はその後について歩き出した。千田さんは二人を一町ほど離れた小さな喫茶店に引っぱって行った。

「アイスクリームかい？ そうそう、此処ではみつ豆も出来るよ。・・・・・・おい姐ねえさん、みつ豆二つとプレソダー一杯くれないか」

君香が早速その話を持出した。二度会った時の頼もしさから彼女はまるで自分の情人に朋輩の不幸を打明け始めた。

「ふん、ふん、ふん」

千田さんはそう云ってうなずきうなずき聞いていたが、君香の話が終わると、顔の色一つ動かさない相変わらずのにこやかな調子で、

「それで何かい、太田君に玉千代さんのお腹の始末をしろって、こういうのかい？」

「ええ」

「そいつは少々難題だぜ」さびた太い声で彼はざばりと云った。「そいつは太田君が玉千代さんのレッキとした旦那でもあるならそれは別だがね。そうだろう、玉千代さん、お前さんも太田君以外にお客を取らなかったわけではないんだからね」

「でも玉千代さんはオーさんだって云ってるんですよ。玉千代さんがほんとに打込んでいたのはオーさん一人なんですもの」

「あっはははは。そんな事を云ったってそれで話の筋が直ぐ通るわけには行かないやね。まあ一応太田君に聞いて見るがね、もっとも太田君の方でも玉千代さんが好きで玉千代さんの事なら何でも俺が引受ける、とこう云わないものでもないから・・・・・・」

外に出てからも君香は一人で口惜しがっていた。が玉千代自身は別段口惜しくも何ともないのか却って平気な顔をしていた。

「だって仕様がないわ、惚れたのはあたしの方なんだから」

「でも、あんた、余りじゃないの」

「いいわ、あたしが始末をつけるから」

「どうして始末をつけるの。うちのおかあさんに知られたら大変じゃないの」

「大丈夫よ、どうにかなるわ」

どうにかなるといふアテがあるわけではなかったが、そうなっても考えて解らない事をいつまでも考えてくしゃくしゃしているという事は、彼女の気質に合わないらしかった。

「暢気ねえ、あんたという人は。ほんとにつくづく……」

と君香は呆れたように云った。

それから君香は玉千代を誘って度々停車場まで電話をかけに行つた。オーさんはいつかけてもお留守ですと工業会社の女事務員が答えた。千田さんはたまに電話口に出ることはあつたが、ただ「はあ、はあ」と云っているだけで、一向要領を得るような返事をしなかつた。

この前の時もそうだったが、今度も玉千代にはツワリと云うようなものが来なかつた。彼女はこの前のお産の一ヵ月程前までは平気で編笠をかぶって諸所方々を流して歩いていた。

四ヶ月も経つた頃になつても彼女は一向容色が衰えなかつた。それで眼の鋭い玉吉姐さんも鈴源の女将も、少しもそれらしい疑いを彼女に持っていなかつた。

彼女がとうとうそれを看破されたのは、もう五ヶ月目になつてからだつた。

「だらしがねえ、まあ、客商売をしていて！」玉吉姐さんはじろりと彼女を見据えて云つた。「そうになったらそうなたで誰かに押しつけられる位の腕がなくなつて、お前どうするんだい？」

その事は直ぐ鈴源の女将の耳にも聞えて行つた。

「だから男に惚れるじゃないって普段から云つて聞かせてあるのに……」女将は吐き出すようにそう云つたが、そういうそばから又こんな事も云つた。「それでいてお前、オーさんに逃げられてしまったんだらう。こうなるならこうなるで何だつて早くオーさんをしっかり掴まえて置かないんだい？」

玉千代は鈴源の女将と玉吉姐さんの前に手をついて「済みません」と云つて涙をぼろぼろこぼした。

「済みませんで済むと思ふのかい？」

「……」

済みませんで済まなくても併し別段玉千代にはどうしようもなかつた。身体の利く間だけ働いて八月目になるまでに何とかしてお金を溜め、何処か附近の産婆のところに行つて生もうと、彼女は漠然とそう考えていた。

少し身体の重さを感じても併し座敷に出て大儀なような事はなかつた。彼女は相変らず騒ぎ、相変らず活惚や雨しよぼを踊り、相変らず土地の人気者だつた。

彼女のお腹の噂がだんだん拡まり、他の妓たちが「ボテだつて……」「ええ、そうよ」などと座敷の隅で目顔と手附で囁いているのが眼に入つても、玉千代には一向そんな事は気にならなかつた。

固く帯を締めているので前からは一寸解らないが、横から見るとむっくり膨れているのが次第に解って来た。七月になっても彼女は平気で踊ることを止めなかった。

「おい、おい、誰のタネだい？」などと露骨に云う客があっても、彼女は酒蛙酒蛙しゃあしゃあとして、

「さあ、誰のかしら？ あんたじゃなくって」と平気でチャラッポコを云っていた。

「生まれながらに芸妓に出来ている妓だよ」と鈴源の女将と玉吉姐さんとは陰で舌を巻いていた。

兎に角、一種の流行っ子だという点が鈴源の女将と玉吉姐さんにも彼女に好意を持たせる原因であった。

八月目になった時、彼女は自分が覚悟を極めていたように知らない産婆の二階に自分を預けに行かないでも、鈴源の女将の指図で茅ヶ崎の女将が知っている或別荘に預けられる事になった。そこで彼女は再び女の子を生んだ。そしてそれはすぐ別荘の世話で大磯に貰われて行った。

産後一ヶ月半で彼女は再び座敷に現れた。衰えた様子は少しもなく、寧ろ少し頬の痩せたのが彼女を前よりも美しく見せていた。君香があきれたように彼女は子供を生んで来た事も忘れたようにけろりとしていた。彼女は二ヶ月目の終り頃からもう活惚を踊り雨しよぼを踊って、土地の人気を又一手にさらって行き始めた。そして三ヶ月目には株屋のキーさんに惚れて、又君香を誘ってN停車場前の公衆電話まで呼出しの電話をかけに行った。

「のろけ賃よ」そう云って彼女は電話の帰りに君香に萩の餅を奢り、丁度前にオーさんの事を語ったようにキーさんの事をしきりに喋った。

「ほんとに、あんたのような気持になりたいわ。……つくづくあたし損な性分だわ」と君香がしみじみ述懐するのも前と変りがなかった。

「くしゃくしゃしたって仕様がなないじゃないの。どうせ世の中はなるようにしかならないのさ。笑って暮していりゃそれでいいのさ」

三

一年後に玉千代は又妊娠した。けれどもそれは株屋のキーさんの胤たねではなかった。そうではなくて、その土地には夏になると昔から村相撲の稽古場が出来た。これは、東京近辺の村々では昔から盛んで方々にそうした土俵が出来、夜の六時から九時頃にかけて若い者達が集まり相撲を取った。土地の料理屋などにはそこに金をいくらか宛を寄附すると、それが四本柱に紙で貼りつけられ、そして金は煙草に換えられ五人抜きをしたものに与えられるのだった。

暇な晩には師匠達はその土俵のまわりに集まってみんなひいきを拵しらえ、金切声を揚げて声援するのだった。

その中に待乳山まつちやまと呼ばれる大工の留さんを玉千代はひいきになって行った。二十二貫もある立派な体格の、皮膚が桜色にぼうとして美しかった。そしてその留さんが土地の大関格だった。

或晩角筈の連中がそこに遠征に来た。角筈の素人相撲というのは東京府下でも有名なもので、大相撲の十両格でもその連中とやると土がつかないとは限らないと云われていた。その角筈の中で最も強い五人程がやって来たのである。彼らは何処に行っても土俵破りとして恐れられていたが、この土地でも到底彼等に敵するものはなかった。出るもの出るものばたばたと投げ倒された。とうとう終いには留さんの待乳山が出る事になった。その留さんも彼等の一番強い、留さんよりは身体は小さいが筋肉の隆々とした全身が力瘤のような男と立合うと、てんで相撲にならなかつた。留さんは何遍も何遍もかかかって行ったが、ころりころりとまるで大根のように転がされた。

それをじっと堪えていた玉千代は突然金切声を振り上げて、「おい、お前さん達も好い加減におし。お前さん達の強い事はよく解っているんだから、もう沢山だよ。何もこんな処にやって来て威張らなくたっていいよ」そう云ったかと思うと、転がされた留さんの側に寄って留さんの身体の砂をハンケチで払ってやりながら、角筈の連中に向って顎を突き出すようにして、下眼に屈強な連中を睨みつけた。

それが余り唐突だったので、暫くは敵も味方も呆然として彼女の様子を見ていた。

それでその日の相撲は無茶苦茶になってしまったが、その時から玉千代の留さん熱は急に昇騰し始めた。彼女はお座敷の行き帰りにたった一人で留さんの住んでいる長屋までよく駈けて行った。

「玉ちゃん、好い加減におし。土地の若い衆なんかに手を出すと承知しないよ」と玉吉姐さんに怒鳴られても、玉千代は首をすくめてにやりと笑うだけで、翌日は直ぐ留さんのところに駈け出して行った。

今度の胤たねは留さんのだと彼女も思い留さんもそれを承知した。併し妊娠しても彼女は今度は君香にもその事を打明けなかつた。

彼女は或日留さんとしめし合せて何処にどろんを極めてしまった。何処に逃げ出したものか、玉吉姐さんが血眼になって探しても皆目行方がしれなかつた。

併し一年ほどするとけろりとして彼女は再びこの土地に現れた。

「かあさん、済みません」と云いながら、彼女は三升家ののれんをのっそりと潜って入って来た。

「まあ、お前という人は……」

もとより三升家に取りつては大切な妓だった。さんざん叱言きつげんを云った末玉吉姐さんは彼女の帰参を叶えてやった。

「これからはつつしみますから」

彼女は留さんの事も子供の事も何も云わなかつた。その頃はもうひと廉かどの姐さんらしい尾鱒おびれのついた君香に向って、「随分苦勞したわよ」と唯こう云っただけだった。

彼女はもう二十三になっていたが、三人の子供を生んだ女とは誰の目にも見えなかった。相変らずのおかめ顔の、色は飽くまで白く、皮膚のキメはこまやかで、皮下にぼつりと脂肪がついて、それがみずみずしい艶めかしさに光っていた。長い間の乱雑な生活に血液が濁るとか、白粉焼けの後が鼠色になるとかという事が凡そなかった。素人娘のように生き生きした肌だった。

彼女が何処かに行っていた間に震災が来、震災後の東京の郊外の発展に洩れず、その土地も今や見違えるようになっていた。停車場（中野駅）とその土地（新井）も今や見違えるようになっていた。停車場とその土地との間の田圃や畑はすっかり埋められ、そこに立派な賑やかな町が出来ていた。一品料理屋でないカフェが軒を並べて、二年前には夜など淋しくて一人では歩けなかった辺りに、蓄音機のジャズの音が渦を巻いていた。師匠は今や芸妓げいこと一段の名義の進化を来していた。三軒の置屋は八軒に殖えて、妓達は今や三十人を越えていた。

「随分この辺も変わったね」

「ああ、変ったよ。お前、もう前のように暢気にしてられる時節じゃなくなったよ。新橋にいた妓も、赤坂にいた妓も、芳町にいた妓もいるんだからね。お前しっかりやってくれなくちゃ……」

「ええ、今までの埋合わせをして一所懸命働きますわ」

「鈴源も震災後の好景況でしこたま儲けたと見えて、二棟も座敷を建て増していた。その二棟の西側には、前に畑だった地所を買い込み、そこに築山や池のある庭が出来上っていた。そして一棟の方は震災後めっきり殖えたつれこみ客のために小さな部屋が幾つも仕切ってあった。その棟の廊下にはこの辺の料理屋では昔見かけなかった断髪や洋装の娘達の姿がちらついたりした。

「まあ、ほんとうに変ったわねえ」玉千代は鈴源の女中のおきみにそう云って眼を瞠った。

「ほんとうに変ったわよ。まあ、一寸こっちへ来て御覧なさい」とおきみは玉千代の袖を引いて新館の上り口の下駄箱のところにつれて行き、それを開けて玉千代に内を窺かした。

「ちょっいと、玉ちゃん見て御覧なさい。昔はおつれ込みと云ってもみんな芸妓衆よ。だから下駄箱の中にはイキな下駄が並んでいたでしょう。ところが御覧なさい。近頃はこの通りよ。靴もあれば、こんな野暮ったいぼてぼてした草履もあれば、掃溜にだって落っこちてないようなチビた下駄もあるのよ」

「まあ、驚いたわね。一体こういう人達は何でしょう。？」

「女事務員もカフェもあれば、女学生もいるのよ。……何しろ近頃の素人と来たらとても玄人はだしよ」

次に玉千代が妊娠したのはそれから二年後——彼女が二十五の年だった。その時は彼女はもう自前になっていた。彼女はもう厭な客は取らなくてもよかった。この土地の発展

につれてこの土地でも今や芝居の総見ぐらいするようになっていたが、今度のは、浅草に出ていた或喜劇俳優の胤だった。オーさんの時よりももっとはっきりと彼女はその日ひにちまでも数える事が出来た。

その喜劇俳優は自分の子供である事を否定しなかった代り、それについてどう責任を負おうとも云い出しはしなかった。舞台上で愛嬌のある代り素面ではぶっきら棒な色の黒い少々馬のように長い顔の男だったが、「ふうむ」と云ったきりで何も云わなかった。

「好いわ。あたしが始末するから、唯あんたの子供だと思っていなければそれでいいの」

全く彼女はお産の費用を彼に出して貰おうとも思っていなかった。平生の逢瀬の費用も自分から出していた位だったから。そして無理算段すればどうやらこうやらその位の事が出来るようになっていた。もっとも、そのため君香が月々両親のところに仕送りをした上に著物ぐらい拵えて行くのに、彼女はいつも素寒ピンだったけれど……

「まあ、玉ちゃんにもあきれたね。お前さんは直ぐ出来る質なんだから何とか少し用心すればいいんじゃないか」

それを知って玉吉が顔をしかめると、

「だけど、かあさん、その場になりゃそんな水臭いことあたし出来やしないわ」

彼女は八ヶ月目から今度は自分の費用で蒲田の方の産婆の二階に自分の身を預けた。生まれたのはやっぱり女の子だった。今度は彼女はその産婆の手から里親を探して貰ってそこに預ける事にした。

喜劇役者ともその後半年ほどは会っていたが、大阪生まれのその喜劇役者は一座の都合で大阪に帰って行った。彼女はその男の好きなウイスキーを買って東京駅まで送って行って、汽車が動き出すとハンケチなどを振っていたが、その帰りに三越の食堂に寄って昼御飯を食べ始めた頃には、もう大してその男の事は考えていなかった。

四

ある時、鈴源の女将からこんな話が持上った。それは彼女が二十七の時だった。

「玉ちゃん、お前もいつまでもそうふらふらしては仕方ないんじゃないか。お前はもともとあたしがこうと見込んで、この土地に出て貰っているんだから、あたしはいつもお前をひいきにしているんだよ。この土地が発展して来れば、お前なんかは生え抜きの大姐さんになれるんだからね。ゆくゆくは妹に話して分わけ三升としてお前にのれんを分けさせてやろうとまで、あたしは昔から思っているんだよ。お前、こんな耳よりな話って、無暗にあるもんじゃないよ」

そう云って鈴源のおかみは声を低めて、さも内々の話と云った調子で、

「大坪さんて、お前も知ってるだろう。日本橋の金物屋の大問屋さあね。金物問屋としては東京でも一二の大旦那だよ。おちついた好い人柄さあね。時々水野さんや熊谷さん

の一座でいらしゃることはあるが、いつでも綺麗に遊んで、さっと引揚げて行っておしまいになる方さ。よく物の解ったお方だよ。あの方がお前を世話したいと仰っしゃるんだがね」

玉千代は胡麻塩頭の、品の好い、六十位の如何にも大所の大旦那然とした大坪さんの姿を思い浮べた。

「こんな結構な話は、ほんとうにないと思うよ。お前はどうかね？」

「……………」

「ね、無論お前は否やはないと思うけどね。……………あたしだって若かったら、飛んで行きたいと思う位なもの、あたしもこんな運がお前に向いて来たと思うと、嬉しくて堪らないんだよ。ね、お前だって異存のある筈はないだろう？」

「どうぞかあさんの宜しいように。うちのかあさんさえ御承知下されば……………」

「おお、よく承知してくれたね。それでこそ玉ちゃんだよ。妹にはあたしから話すからいいよ。無論否やのあろう筈はないやね。お前の出世の道なもの」

鈴源の女将は眼を細くして、上機嫌にそう云ったが、一寸容^{かたち}を改めて、

「ねえ、玉ちゃん、此処に一つの条件があるんだよ」

「どんな条件ですの、かあさん？」

「それはね、お前に子供を生んで貰いたいって先様じゃ仰っしゃるんだよ」

「あら、厭だ！ そんな事……………」

「それだから、この話はお前に相談するより外ないんだよ。先様じゃあの通りの御身代だけど、御不幸な御夫婦で、三十年以上もつれ添うているのに、お子さんが一人もないって仰っしゃるんだよ。——玉ちゃんなら造作ないやね。直ぐ生まれるって、あたしがお受合したんだよ」

「あら、いやなかあさん……………」

「ねえ、一所懸命生んでおやりよ、みんなに喜ばれて、お前もお金の儲かることなんだから。——いいね。それじゃ今夜旦那がいらっしゃるから、お湯に入って、よくお化粧して置くんだよ。……………それから」女将は此処で一寸にやりと笑ったが、言葉だけは厳かに、「もう一つお前に云って置かなければならないのは、旦那にお世話になっている間に、お前が浮気しては困るんだよ。これはあたしが嚴重に監督しますって、旦那に約束したんだからね。旦那はヤキモチで仰っしゃるんじゃないんだよ。生れる子供が旦那の子供でないと困るからって仰っしゃるんだよ」

「大丈夫よ、そんな事は、かあさん」

「子供を生んでしまえば、後はいくらでも口直しが出来るんだからね。いいかい、頼んだよ」

「おほほほ」

「はははは」

この不思議な取引が結ばれると、その晩早速玉千代は大坪の旦那に逢った。柔かみの間

にも威を崩さないその旦那は、玉千代には、今迄のどの男とも全然違った種類の人物に見えた。彼女は月々五百円の手当を貰い、身のまわりのものなどがどんどん殖えて行った。老人の旦那に若い人に対するような情熱は感じなかったが、併し彼女は信頼出来る人物に逢ったような気がして、その腕の中にいる間たのもしかった。

彼女は約束通りに浮気をつつしんだ。そして半年後には人々の希望通りに、彼女の身体は変調を来して来た。旦那は飛上るように嬉しがった。鈴源のおかみも喜んで神棚を拝みに行った。玉吉姐さんも喜んだ。そしてそれ等の人々の喜びを見るにつけ、彼女は五度目の妊娠で始めて妊娠を喜ぶ気持が解った。

玉千代は大坪さんの鎌倉の別荘に移された。女中や下男が彼女にかしずいた。彼女は昔のお部屋様と同じような待遇を受けた。

時々旦那と一緒に奥さんもやって来た。五十五六の品の好い奥さんだった。

「大切にして下さいよ」と彼女は玉千代の身体を毀こわれ物でも庇かばうように気遣わしように眺めていた。

「ほんとうにいろいろ御苦労ね」と奥さんに云われた時には、玉千代は何と答える事も出来ず、恥しさと嬉しさにうつむいていた。

今までの彼女のお産がすべて軽かったと同じように今度のお産も軽かった。東京から態々わざわざ派遣された産婦人科の博士と熟練した産婆とが、余りの安産に却って呆気ない顔をした位だった。それは男の子だった。電話で大坪の旦那も奥さんも相好を崩して飛んで来た。別荘中がお祭のような騒ぎだった。鈴源の女将も玉吉姐さんも電報に取るものも取り敢えずと云った恰好で駆けつけて来た。

併し今までの妊娠を中心にしてチャホヤしていた空気が、お産と共に一変したのを玉千代は感じ始めた。彼女のお腹から出たものは今は彼女のものでは到底ない、高い高い雲の上に躍り上って行ってしまったように思われた。隣りの赤児の部屋からはまだ何も解りもしない赤児をあやすように、「よいよい」とか「ばあばあ」とか云っている大坪老夫婦の声が聞え、夫婦に向って喜びを云いに来た人々のいろいろな挨拶が絶えず聞えて来た。けれども彼女の産褥さんじょくには産婆と看護婦のほか誰も見まわりみに来なかった。彼女は赤児の顔を見たいと思ったが、それも出来ない事に思われたので、時々聞えるその泣声に胸をふるわせるだけであきらめなければならなかった。彼女は打捨てられた人間の淋しみを産褥の上で味わっていた。

半月目に赤児は日本橋の本邸につれて行かれた。彼女はその日一日眼を真赤にして泣いていた。そしてそれからの別荘は一人の下女と一人の下男とが残っただけで、ひっそり閑と静まり返ってしまった。

彼女は1ヶ月半の後再び薬師の側に戻って行った。鈴源の女将が一万円の金を大坪の旦那からの手切金だと云って彼女のところに持って来た。彼女はその金を見ると嬉しさと悲しさで涙が出て来た。

分三升というのれんが三升家から彼女に分けられた。彼女は三人の抱えを置く押しも押

されもしないその土地の大姐さんとなった。彼女は自分の成功と立身が嬉しかった。が、それが嬉しいにつけ、彼女にそうした成功と立身とを与えたあの第五番目の子供に時々逢いたくて堪らなくなってきた。今まで生まれた四人の子供はみんな彼女に苦勞を与えた。併し彼女に安樂を与えたのは今度の子が始めてだった。彼女は今までの子供の顔を見たいなどと思う事はつめったになかった。併し今度の子供だけはどうかして会い、どうかして胸に抱きしめて見たいと思った。

それから大坪の旦那はその土地に時々やって来た。そして来るといつでも玉千代を呼んでくれた。が、手切金を鈴源の女将に渡した彼は二度と玉千代の手を取ろうとはしなかった。昔のように綺麗に遊び綺麗に引揚げて行った。玉千代は嘗ての喜劇俳優やオーさんやなどとは違った、何とも云われないなつかしさを、今更のようにこのおちついた六十の老人に感じて来た。これが恋かしら、などと彼女は胸に呟いた。が、その気持は押し殺さなければならぬものである気がして押し殺した。

ある日大坪の旦那が来た時、玉千代は一度子供に会わせてくれとせがんだ。

「うん」

大坪の旦那は暫く考えていた。こどもをだいた彼の老妻がいつか玉千代がそれを取戻しに来はしないかという脅迫観念に襲われていたからである。

「後生ですから、たった一日でよござんすから」

涙をうかべて懇願する玉千代の顔を見ると、彼はその心も無理がないように思われた。

「うん、それじゃほんの一目だよ。——明日の夕方五時頃わたしが坊やを抱いて店の前に出ているから、お前は自動車でその前をお通り」

翌日は曇れた静かな日だった晩春の日がうららかに当たっていた。玉千代は君香を誘って正午を過ぎると直ぐ東京に出て行き、活動小屋で時間を潰して、約束の時刻の五時頃タクシーを拾って大坪の店の前を通った。それは大きな金物問屋で、如何にもしにせらしい構えをした店の前にトラックが二台停っていた。その店の前に近づくと、彼女は運転手にそう云って速力をゆるめさせた。

最初は誰もいないように見えたが、丁度店の前に行った頃、二台のトラックの間から大坪の旦那が赤ん坊を両手でさし上げるような形をしながら現れて来た。赤ん坊は白い帽子をかぶっていた。

玉千代は自動車の窓から赤児の顔をしみじみと見た。赤児を此方向きにさし上げているために旦那の顔はその陰になって見えなかった。が、自動車がその前を通り過ぎると、旦那は始めて赤児の背中の裏から顔を出して、遠ざかって行く玉千代の方を向いてにっこり笑った。

玉千代は君香の手を握って泣き始めた。

「察するわよ、察するわよ」と君香は彼女の背中をさすりながら彼女の耳に囁いていた。